◪マダム・KO（十卷）（三二巻米）

帝キネ　現代映畫

原作者　竹田敏彦
脚色並監督者　川口松太郎
撮影者　小原讓治
主演者　鈴木澄子
草岡瀬良章太郎

紹介

文士から映畫界に入り、おぞましくも直ちにメガフォンを握つて幾つかの作品を發表した勇敢なる騎士、川口松太郎が、いまこの作品に依つて始めて「一本立の監督」に成り得たことを、この映畫が最も雄辯に語つてゐる。

彼が今日まで踏んで來た映畫道は、その製作態度は「模倣の世界」を一歩も出で得なかつた。器用な小手先細工で、數多の諸先輩の作品を切り貼りしてゐたのだが、こゝで彼は危く立ち直つた。目覺めた。「映畫製作ABC」から發足し直した。これは、その出來の如何に關らず川口松太郎のために、亦誇張が許されるならば、日本映畫界のために、祝福すべき事だ。

先づ「正攻法」を採つた。漸く立つて歩けるやうになつた赤ん坊の如く甚だ危な氣な足どりではあるがそれは正しかつた。眞劍であつた。そしてそれは酬ひられてゐた。いま一息の「押し」を望むことも、テムポの整調、更らにコメディ・リリーフへの洗練も、必要ではあるが、それは次回の作品への期待として、先づ彼の新しき首途とその成功を共に喜び度い。

作品の致命的缺陷が一つある。それは鈴木澄子を主役に選んだことである。他に適當な女優が帝キネでは探し求め得られなかつたことも、一應は合點が行くが、それならばそれで、その演出にもつと内容的な指導を欲しかつた。鈴木澄子には「近代人の生活とその空氣」を呼吸出來得ない。藝妓時代は、その前後共悪からう筈はないが、夫人となつて、殊に「マダムKO」と謂はれるやうな女性となつてからの表現は殆んど零である。單に良人が野球が好きだから、良人の趣味に合致するために、何も判らず野球を愛好するのならばいざ知らず、高松記念碑を邸内に建てたり、グランドを作つたり、弟をして、一姉の野球趣味は狂氣の沙汰である」と憤慨せしめたりする程のファンとは、どうしても受けとれぬ演技である。畢竟これは、鈴木澄子自身の、近代趣味の缺乏であり、それを良く理解させ、演技上の指導を忘れた監督の不注意でもある。眞操を早慶戰に賭ける。そのクライマックスもそれ故にの高調に不足してゐた。「マダムKO」と呼ばれてゐたのは、何時の頃からかの、概念的説明も忘れてゐる。單なる亡夫への眞操を守つた一女性の物語りに、これを絡らましめたことは、少くとも、匿名が時代に迎合してゐるだけに、甚だ遺憾であつたといはざるを得ない。それには、宮武、水原等の選手達との交渉の説明不足もあるのだと思はれる。實在の人物であるから、餘りに劇中に織り込むことが困難であつたであらうが、字幕その他の方法で、もつと深くして置くべきであつた。これは脚色への難である。

瀬良章太郎、草岡實、共に良い。球場の實寫の編輯もよくされてゐた。――鈴木重三郎――興行價値――マダム・KOの名は、シーズンには可成りの吸引力を持つであらう。たゞ注意すべきは、觀客に早稲田ファンの多い館では止めた方がいゝ。野球ファンはその色彩が可成一方に偏してゐる場合が多いから、何んでもないたゞの物語にしても、反感を買ふことは揭なことだ。

（七月廿二日　常盤座）